

ドライマーク衣料も洗える家庭用洗剤の特性について
東京家政大短大 小林泰子

最近、「ドライクリーニング効果をご家庭で」、「ドライマーク衣料が家庭で洗える」と書かれた洗濯用洗剤を店頭でみかける。これらの洗剤はクリーニング代の大幅節約、布地の風合いの向上・型くずれや縮みの防止や環境汚染を起こすフロンを含まず安全等をうたっている。しかし家庭でドライクリーニングを行うわけではなく、水に洗剤原液や粉末を溶かし衣料をつけ置き洗いする。これら洗剤の家庭用品品質表示法に基づく表示をみると、用途は毛から綿・合成繊維まで使用可能だが、液性は中性だけではなく弱アルカリ性のものもある。成分はアルキルエーテル硫酸エステルナトリウムやポリオキシエチレンアルキルエーテルを主とするが、直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウムを含むものもある。界面活性剤の割合は30%前後のものが多く、標準使用量は水30ℓに対して10～15gである。このような洗剤を使用してドライマーク付き衣料の洗濯を家庭で行った場合の洗浄性、収縮性等は、表示通りの効果が期待出来るのか。そして経済性や安全性のアップにもつながるのか。また洗剤排水の生分解性はどうか。本報ではこれらの問題を考えるために、従来の衣料用中性洗剤や弱アルカリ性洗剤とも併せて洗浄性、収縮性、BOD測定による生分解性の比較検討を行った。洗浄性と収縮性に関する実験では羊毛モスリン布に人工汚染布（綿，毛）をつけ、つけ置き洗いを行い、洗浄効率と収縮率を算出した。その結果、洗浄性は従来の中性洗剤と同等かそれより劣った。また収縮率は縦方向では0.0～0.5%、横方向では1.5～3.0%と多少の縮みがみられ、従来のものと差はなかった。従って水を使う限り従来の中性洗剤以上の効果はあまり期待できない。